

チェコ語で「受け身」のニュアンスを表現するには、いくつかの方法が考えられる。一つ目は分詞による方法が挙げられる。これは、動詞から受動分詞を作り、コピュラ být と組み合わせる方法である。

例：Karel IV. založil univerzitu. カレル4世は大学を創設した。

→ Univerzita byla založena Karlem IV. 大学はカレル4世によって創設された。

受動分詞は主語の性と数にあわせて形容詞の短語尾と同じ語尾を取っている。「～によって」の部分は造格（主として道具・手段を表わす格形態）とする。

再帰形、すなわち、再帰代名詞対格の短形（clitic form）である se を加えることによっても受け身を表現できる。

例：Tady prodávají lyže. ここではスキー板を売っている。

→ Tady se prodávají lyže. ここではスキー板が売られている。

現代チェコ語では、受動分詞より再帰形の方が多用される。しかし、再帰形によって受け身を表わすには制限がある。第一に、主語（行為の受け手）が3人称のときにしか用いることができない。第二に、行為者「～によって」を表わすことはできない。

以上、受動分詞と再帰形がチェコ語の受動態構文として認められる。いずれも、能動文の目的語が受動文で主語となるところが共通している。しかし、目的語を取る能動文であればすべてが受動文へ変換できるわけではない。つまり、能動文の目的語が対格のときにしか、上のような受動文には変換できない。従って、形式は能動文でありながら、受け身のニュアンスを表わす次のような方法もよく取られる。

不定人称文。動詞は3人称複数形をとるとはいえ、行為者は具体的に明示されない文、あるいは語り手が行為者の明示を避ける文を指す。

例：Tady prodávají lyže.

この文は再帰形による受動構文を紹介する際、変換する前の能動文として提示した。語順。語形変化の豊かなチェコ語は、文中の語順を変えても「文法的な誤り」と受

け取られることは少ない。しかし、自然な語順、よく出現する語順はあり、それがS-V-O、すなわち動詞の前に主語、後に目的語である。この語順が全体の64パーセントを占めるといわれる。¹ これを変えて、目的語をあえて動詞の前に、主語を後に配置すると(11パーセント)、受け身のニュアンスを伝えることができる。しかし、語順はテーマ・レーマの表示とも密接に関連するので、能動態・受動態の観点からのみ論ずることはできない。

以下、アンケートへの回答を記す。² アンケートでA、Bとなっていた箇所は適宜チェコ人の名前などを補った。

(ア) ペトルはアントニーンに叩かれた。

Petra zbil Antonín.

Petr-ACC zbit (PFV)叩く-M 3 SG PAST Antonin-NOM

動詞の前に Petr の対格形を、後に行為者 Antonín を主格形で置く。形式的には能動文「ペトルを叩いたのはアントニーンだ」となっている。

(イ) ペトルはアントニーンに足を踏まれた。

Antonín šlápl Petrovi na nohu.

Antonín-NOM šlápnout (PFV)踏む-M 3 SG PAST Petr-DAT na-PREP noha 足-ACC SG

これも形式は能動文である。Petr を与格(主として間接目的を表わす格形態)にすることにより、行為の受け手であることを表わす。このように、動詞によって引き起こされる動作の恩恵や迷惑を被る者を表わす与格を「利害の与格」と呼ぶ。「足を」の部分には前置詞+対格 na nohu となっているので、この文には直接目的語の対格がない。従って、受動分詞を用いることも再帰形を用いることもできない。

(ウ) ペトルはアントニーンに財布を盗まれた。

Antonín ukradl Petrovi peněženku.

Antonín-NOM ukrást(PFV)盗む-M 3 SG Petr-DAT peněženka 財布- ACC SG

前の文と同じく利害の与格を用いた能動文である。「アントニーンはペトルの(から)

¹ Uhlířová, Ludmila. 1987. "O slovosledu věty jednoduché", Těšitělová, Marie a kol. *O Češtině v číslech*, ACADEMIA Praha, pp. 137-144.

² チェコ語訳に際しては、本学の特任外国語教員イジー・ホモラーチ氏のアドバイスをいただいた。

財布を盗んだ」。財布 peněženka を主語とする受動文は理論的には可能だが、頻度は低い。これについては(キ)で詳述する。

(エ) 昨日の夜、私は赤ん坊に泣かれた。それでちっとも眠れなかった。

Včera v noci mi plakalo miminko, a proto jsem nemohl usnout.

včera 昨日-ADV v-PREP noc 夜-LOC SG já 私-DAT plakat(IMPF)泣く-N 3 SG miminko 赤ん坊-NOM a proto-CONJN moct できる(IMPF)- M 1 SG NEG PAST usnout(PFV)寝る-INF

これも利害の与格 (mi) を用いた能動文である。(イ)と同じく対格のない文なので、受動分詞も再帰形も用いることはできない。

(オ) 新しいビルが建てられた。

Nová budova byla postavena.

nový 新しい-F NOM SG budova ビル-NOM SG být-COP F 3 SG PAST postavit(PFV)建てる-F SG PASSP

これは受動分詞を用いた文だが、次のような不定人称文も可能である。

Postavili novou budovu.

postavit(PFV)建てる-Ma 3 PL PAST nový 新しい-F ACC SG budova ビル-ACC SG

(カ) カナダではフランス語が話されている。

V Kanadě se mluví francouzsky.

v-PREP Kanada カナダ-LOC se-REFL PRN mluvit 話す-3 SG PRS francouzsky フランス語で-ADV

再帰形を用いる。「話す」mluvit, 「いう」říkat は話しているのは誰なのか、いつているのは誰なのかあいまいにするときには、再帰形となることが多い。Říká se, že...「～といわれている／～だそうだ」。最後の francouzsky は「フランス語で」という副詞である。従ってこの文には主語がない。このような文は「無人称文」と呼ばれ、形の上では3人称単数形（過去であればさらに中性）となる。

(キ) 財布が盗まれた。

Ukradli mi peněženku.

ukrást(PFV)盗む-Ma 3 PL já 私-DAT peněženka 財布-ACC SG

不定人称文と利害の与格の組み合わせ。頻度は著しく低くなるが、受動分詞を用いて Peněženka mi byla ukradena. ということも可能である。この形式は官公庁の文書を想起させるという。しかし、既述のごとく、能動文の対格目的語だけが受動文の主語になれるので、「私」já を主格の主語とした受動文は作れない。

(ク) 壁に絵が掛けられている。

Na zdi visí obraz.

na-PREP zed'壁-LOC SG viset(IMPF)掛かる-3 SG PRS obraz 絵-NOM

Na zdi je pověšený obraz.

na-PREP zed'壁-LOC SG být-COP 3 SG PRS pověsit(PFV)掛ける- M SG PASSP obraz 絵-NOM

前者は自動詞 viset「掛かっている」を用いた能動文。逐語訳は「壁に絵が掛かっている」。 「掛けられている」であれば、pověsit「掛ける」の受動分詞に形容詞長語尾をつけて状態を表わした後者も考えられる。

(ケ) ペトルは母親に愛されている。

Petr je milován svou matkou.

Petr-NOM být-COP 3 SG PRS milovat(IMPF)愛する-M SG PASSP svůj 自分の-REFL PRN F SG
INS matka 母-INS SG

受動分詞を用いた文。

(コ) ペトルはアントニーンに…と言われた。

Antonín řekl Petrovi, že...

Antonín-NOM říct(PFV)いう-M 3 SG PAST Petr-DAT že-CONJN

これは「アントニーンはペトルに言った」という形をとることがもっとも自然である。文脈から切り離されたこのような状況では、語順を変えることも躊躇される。